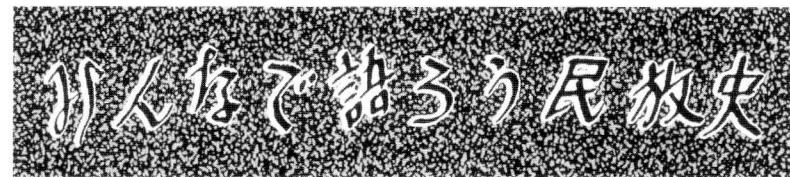


## テレビ創設期技術陣の苦労（後編）

栗田 富士男（NTV）



千代田区二番町の社屋建設予定地

あつた。前号で触れたNHK砧の技術研究所でさえ、一世代前のアイコノスコープという撮像管カメラしかなかつたのである。

我々は急遽、RCA社に、同社の総代理店大倉商事を通じて放送設備発注作業にとりかかつたのはいうまでもない。しかし、問題は、『はじめに予算ありき』なのである。機材輸入として大蔵省から許された外貨は五〇万ドルばかりだった。我々はこれを送信機・アンテナに二〇万ドル、演奏設備一式（生カメラ五台）に三〇万ドルをあてた。当

時は一ドル三六〇円の固定相場だったが、運賃関税を含めると約五〇〇円、総額一億五千萬円の買い物である。今にして思えば、随分みみつちいように見えなくもないのだが、その年の国家予算も一兆円に満たなかつたことを思えば贅沢はいえない。

放送局建設の敷地は、第一条件として、人口分布の中に送信所を置くのがテレビの常道であると前年米国の権威に教えられていました。旧陸軍士官学校跡地（当時、パーシングハイツとして米軍が使っていた）が国有地で、価格的にも安価に取得出来そうだということ

で、当初から、GHQ、外務省、国税局等に払下げ交渉をしたのだが、如何せん敗戦国の悲哀か、目的は叶えられなかつた。（十年後NHKは代々木ワシントンハイツを取得）代替策として有楽町読売別館（現そごうデパート）に本社・演奏所スタジオを置き、都内でも最も海拔高を得られる地点を探し歩いた末、麹町に焼け跡の空き地（旧満鉄總裁邸）を見つけ、ここに送信鉄塔を建てる計画で申請書に記載した。しかしその後、読売別館は修復の焼けビルであるため、テレビスタジオとしては将来の増設が全く不可能と判明したので、有楽町を断念して本社、演奏所、送信所すべてを麹町に建設することにした。

有楽町に固執したのは、朝日、毎日、読売の新聞三社がここに集まつていた。加えて、前年開局したラジオ東京のスタジオも毎日会館にあつた戦前のプラネットリウム・ドームを改装して使つており、いふなればマスコミの中心であつたからである。しかし、やはりなんといつても、まだまだ戦争の傷痕が深く残つており、日本中が貧しくて新聞も放送も焼けビルの補修改装程度で計画せざるを得なかつたのである。

民放に先をこされたNHKは、急遽法令の手続きを経て、昭和27年12月26日予備免許を取得、大急ぎで砧技研の実験局送信機を5キロワットに増力して内幸町本館に移設し、

### 開局への足どり

当時テレビ技術の最先端は、イメージ・オルシコン撮像管（I-O管）生カメラと10キロワット以上の大電力送信機に代表されていたが、両者とも日本では生産はおろか、輸入の現物さえ見た者がない程のまぼろし的存在で



28年8月20日、試験電波の発射に成功

翌28年2月1日開局、なんとかテレビ放送第一号の面目をたもつた。

NHKも送信機は我々と同じRCAに注文したが、カメラについては例のメガ問題にこだわりがあったのか、英國のPYE社のものを採用し、これを標準方式用に改造して使用していたようである（トランス、整流器を外付BOXにしてケーブルで接続）。

我々は前述のように商用電源を60ヘルツに変換するCV-CF装置を設けたので、全く支障はないなかつたが、後に機器増設の度に電源容量への配慮が不可欠となる不便があつた。

すべて輸入機材に頼つたといつても、現在のように各部門専門の工事会社があるわけではなく、ほとんど我々素人集団の手で設営しなければならなかつた。そのうえ、RCAでもハイバンドの空冷式送信機はまだ実績がなかつたため工場出荷が大幅に遅れ、受取は6月末にずれ込み、当初の4月開局予定はどうとう8月28日になつてしまつた。

#### 四ヶ月おくれで漸く開局

7月半ば、前述の送信機とアンテナ系を除いて、やつとのことでスタジオ部分の設営を終えたので、いよいよ本格的番組制作のリハーサルに取りかかることになつた。しかし本邦初演のことばかりで、お手本が全くなかつたことが最大の苦労ではなかつただろうか。

一足先に開局したNHKのやり方を勉強しておくべきだったのだが、建設の真っ最中でとてもそんな暇はなかつた。その間、私の

記憶に残るブラウン管の映像は英國女王陛下の戴冠式に天皇陛下の名代として列席される「皇太子殿下横浜港プレジデント・ウイ尔斯号でご出発」の実況中継と、五月場所大相撲のワンカットだけである。

与えられたテーマが「技術の苦労」となっているが、すべてが生本番だったので、番組を放送するのにサブコンだけでなくマスター、テレシネ、場合によつてはマイクロ中継機を担当する送信機室まで全部が働くという具合で、逐一苦労話をしては枚挙にいとまがない。そこで最後に私の担当した中継の苦労話ををして本稿を終わらせていただくことにすむ。

開局当初アメリカの番組制作情報として聞いたのは、バラエティーショー形式のものと映画フィルムの放映時間が大きな比重を占めていることだつた。日本では本格的テレビドラマなどまだ作れなかつたが、スタジオものはリハーサルに一時間かけて最大三〇分の番組が出来れば上々であるし、劇場映画はテレビの誕生を歓迎していなかつた。いきおい安上がりで街頭テレビ向き（視聴率と言いたい所だがそんなものはまだない）且つ時間が稼げる、三拍子揃つた番組ということで中継制作への要求はかなり強烈で、多い時は一日に三ヶ所の中継をこなしたこともあつた。

#### 中継車を臨時副調に

中継車は中継番組制作のため絶対必要だったが、当時「自動車」は輸入禁止の筆頭品目



テレビ中継車の陸上げ（横浜港）

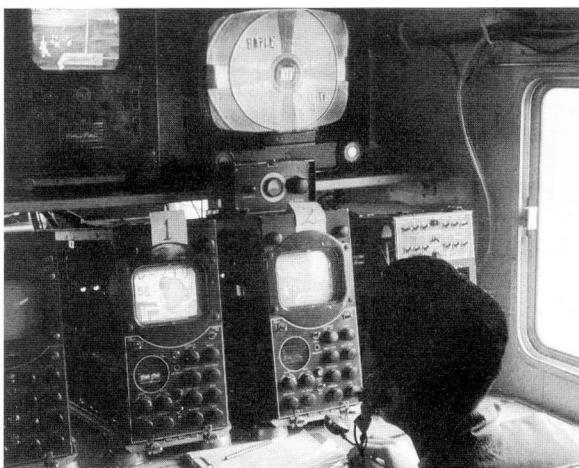
であったので通産省にお百度を踏んでやつと手に入れた宝物であった。映像音声は勿論、コミュニケーションラインの配線等万全の装備が整っているものと信じていたのだが、実物は案に相違して今思えば大型のキャンピングカーを改造しただけのものだった。テレビ中継用の特別装備と見られるものは、30メートルのカメラケーブル巻取りドラム四基と当時まだ珍しかったウインド型クーラーの他、前半分はカメラ操作卓とモニター棚が取付けてあり、後半はカメラ三台その他の専用棚になつていていた。私は開局を目前に大急ぎで、これをコックピットのように“動くサブコントロール”として作り上げることに没頭した。しかし困ったことにNHKの様子を見学していたディレクター達は、こ

の中継車を全く信用しないのである。彼らの言い分は「野球場では九人の野手、打者、審判、監督、コーチ、控えの選手そして観衆の動き全てが被写体なのだ。カメラが撮つた二つか三つの小さな画をただ切り替えるだけでは番組ができるわけがない。NHKのディレクターは、球場全体が見通せる所に座つてカメラにキューを出している。相撲しかり舞台しかりだ」。言われてみれば至極もつとも、神宮球場、蔵前国技館ではそうやっていましたし、日比谷公会堂も下手照明室を空けて専用のテレビ室を作り、中には木製の操作卓が鎮座していましたのを見た記憶がある。

私はこの要求に抗し切れずやむなく、わが

中継車を全く信用しないのである。彼らの言い分は「野球場では九人の野手、打者、審判、監督、コーチ、控えの選手そして観衆の動き全てが被写体なのだ。カメラが撮つた二つか三つの小さな画をただ切り替えるだけでは番組ができるわけがない。NHKのディレクターは、球場全体が見通せる所に座つてカメラにキューを出している。相撲しかり舞台しかりだ」。言われてみれば至極もつとも、神宮球場、蔵前国技館ではそうやっていましたし、日比谷公会堂も下手照明室を空けて専用のテレビ室を作り、中には木製の操作卓が鎮座していましたのを見た記憶がある。

私はこの要求に抗し切れずやむなく、わが



手造りの中継車内部

中継車輸入で税関を説得

中継車が所謂「自動車」の範疇に入れられ、輸入に手こずった話は前に触れたが、RCAからの輸入、通関業務を一手に引き受けている私にとって、今でも忘れることが出来ない税関とのやり取りの思い出がある。それはテレシネの主要設備フィルム・プロジェクターと通関のことだった。書類にFilm Projectorとなつてゐるので、税関は鬼の首をとつたよう

社の看板番組である後楽園球場の中継に限つて機材を持ち込むこととした。

8月25日総合リハーサル決行、昼過ぎから社員総出で機材運搬をして、一塁側内野席後列に臨時副調整室を特設し夜の公式戦に備えた。その日のカードは何だったのか覚えていない。ただ夢中で試合を追つているうちに9回裏が来たらしい。機材を撤収して社に帰つたのは午前二時過ぎだった。全員綿のよう疲れてそこに倒れてしまった。

これではとても開局を迎えるないと、ディレクター達も「臨時副調整室設置要求論」を取り下げてくれたので、この方式は最初にして最後のものになった。

あれから半世紀、マラソン、駅伝、ゴルフトーナメント等ビッグイベントになると中継車単位では処理できないので、プレハブの「特設副調整室」を設営するのが当たり前になつてゐる映像を見かけるが、老兵は「昔の仕事には魂が入つてた！」と心ひそかに自らを慰めている。



後楽園球場に急造した調整卓

に、映画館に置く遊興機器（税率表にこうなつていたか定かではないが）の項目に入れ、贅沢品として50%課税だと主張するのだ。これは通信機器のうち品名明記のない「その他」を適用して20%で通したい。そこで習い覚えたばかりのテレビ技術講習を始めた。

「確かにプロジェクトと書いてあるが、映画館のものとは全く構造が違っている。映画は万国共通で毎秒24コマと決まっているが、テレビはこれを毎秒30枚の画像に重ね直さねばならない。この機械はいうなれば“打ち出の小槌”なのだ」と。しかし天下の大蔵省税関がこんな説明で引き下がるわけはなかつた。私は紙に

$$(2/60+3/60) \times 12 = 60/60=1$$

という算術式を書いて「奇数コマと偶数コマではフィルムの停止時間が違ひ、その割合は2対3になつていて。この機械はテレビ用の特殊機械で映画館ではつかえない」と30歳前の若造がしたり顔で、2-3ペルダウン方式の開陳におよんだ。数式が功を奏したのか、税関も理解してくれて高額の課税は免れたが、実は私も初めて見た機械で、今思いだしても全く冷汗ものである。

しかし、このことは最初に述べたがNTSCとPAL方式に密接な関係を持つておらず、単に方式の違いと片づけることは出来ない。因みに欧州ではこの“からくり”が使えないため、テレビの映画放映は25コマで放送している筈である。ということは映画の一時間ものはPALでは三分半ほど早く終わってしまう勘定になり、民放はスポットCMのことを考えると馬鹿にできない数字である。

（写真の一部は日本テレビ放送網「大衆とともに25年」より転載）



本邦初演のプロゴルフ中継（32年10月）

現役を退いて十五年にもなり、その間の技術革新はより激しく、かつて数億円といわれたNTSC-PAL-SECAM方式変換器も、秋葉原で僅か数万円で入手できるご時世だ。欧州でも今は正規の24コマ放映に切り替えているかもしれないが、フィルム 자체がテレビに登場する機会が少なくなつた昨今、何事にも保守的な欧州がそのためにはテレシネ機器を取り替える筈はないと思っている。十年ほど前に日本がミューズ方式ハイビジョンを世界の標準方式にしようとしたが、歐州に売り込みに行つたが、賛意を得られなかつたことと無関係ではなさそうだ。この辺りの実情がどうなつているのか、機会があれば専門家に聞いてみたい。